

図書館だより

No.
03
2025.11

もくじ

「読書から聴書へ」

副学長 大塚 一徳 ————— 02

教員寄稿

「人を動かす」

経営学科 大田謙一郎 ————— 03

「政治リテラシーから考える政治や社会との向き合い方」

公共政策学科 有本 新 ————— 03

「大学生の皆さんへのおすすめ『竜馬がゆく』」

情報システム学科 平岡 透 ————— 04

「『コスパ』『タイパ』の時代に、

わざわざ海岸で「いい感じの石ころ」を探す」

栄養健康学科 本郷 涼子 ————— 04

佐世保校図書館コーナー

「大学で学ぶメリットとは」

佐世保校附属図書館長 綱 辰幸 ————— 05

図書館アルバイト学生からのメッセージ

「大学生生活に図書館という選択肢を」

経営学科 4 年 池野谷光李 ————— 05

「ふらりと立ち寄る図書館時間」

公共政策学科 4 年 村川 琴美 ————— 05

シーボルト校図書館コーナー

「知の迷宮探索への誘い（その2）」

～アクチュアリティな学びの実空間としての図書館の意義～

シーボルト校附属図書館長 河又 貴洋 ————— 06

図書館利用案内電子書籍

07

読書から聴書へ

副学長 大塚 一徳



大塚研究室の窓からシーボルト校図書館を望む

佐世保キャンパスもシーボルトキャンパスも本学の図書館は充実している。私の教育心理学の授業では、毎年学修環境について受講生と一緒に検討する。例年3分の1くらいの学生は本学図書館をもっとも好きな学修場所として選ぶ。ちなみに他の学修場所は自室、空き教室、カフェである。私のゼミ生も各種就職試験の前に数ヶ月間、開館から閉館まで本学図書館に籠もって、合格を手にした学生が何名もいる。本学の素晴らしい図書館環境はずっと残していかないといけない。

仕事に必要な専門的な書籍を読む、研究を進めるために論文を読む、といったことのための私の読む方法は大きく変遷した。私が学生の頃、つまり40年以上前は専門書なんて買う資金の余裕はないので、書籍にしても論文にしてもただひたすらコピー機でコピーをしていた。院生のときは月末に研究室の助手の先生からの請求額におびえていた。

歳月はまたたく間に過ぎ去って、今では論文も専門書も紙媒体ではない、もちろん紙媒体もあるのだが、紙媒体を読むわけではない。PDFかWebだ。時間があればただひたすらディスプレイを見つめて論文を眺めている。ご丁寧に引用文献にはDOI (Digital Object Identifier) がついているので、ついついDOIをクリックして引用元論文へ飛び、そこからまた引用元論文へ飛び、気づくとブラウザはタブだらけになり、そもそもどの論文を閲覧していたのかわからなくなる。こういう世界をWorld Wide Web (WWW) の提唱者は予見していたのだろうか。仕事に必須の私の読書はディスプレイ上で気づくと2時間とか3時間とか続いて、後頭部から頭頂部にかけて頭痛がしてきたりする。

学術論文を執筆する時には、関連する論文や専門書を引用文献として記載しなければならない。そのために、執筆に必要な先行研究の論文等を保存して整理整頓することが必要だ。この文献管理のために苦労して自作のエクセルの文献管理法を考案したり、文献管理アプリを利用したりしていた。5年ほど前、Paperpileという文献管理アプリを導入することで劇的に文献管理が改善された。文献管理に困っている院生にはおすすめのアプリと

して推薦する。

楽しみとしての私の読書は学生時代の文庫本、給料がもらえるようになっての単行本、そして今はkindle (Amazonの電子書籍) 端末や、スマホやタブレットでkindleアプリを利用した読書だ (専門書や論文をkindle端末やタブレットで読む事も多い)。

kindleのライブラリを確認すると数え切れないほどの本が既読になっていた。純文学から実用本までいろんなジャンルのものを読んでいる。村上春樹、和田秀樹、保阪正康の著書が最近のお気に入りだ。

村上龍は佐世保出身の芥川賞 (1976年) 作家で、この作家の著作はほぼすべて読んだ。佐藤正午は佐世保出身でかつ在住の直木賞 (2017年) 作家で、佐世保のよく知っている地名が小説の中に登場し嬉しくなる。「全身小説家」というドキュメンタリー映画にもなった井上光晴は、佐世保や佐世保周辺の炭鉱を題材にした私小説を多く残している。20万人そこそこの人口の極西の街に、このような日本を代表する作家が誕生したことは誇らしい。

2年前くらいに私の楽しみの読書は劇的に変化した。読書ではなく「聴く書」になった。Audible (Amazonのオーディオブック) を使うようになったのである。今Audibleのライブラリを確認したら250冊以上既読となっていた。運転するときや出張で移動している時はいつもAudibleを聴いている。

学生に薦めたい著者として、橘玲、出口治明のお二人、書籍として「汝、星のごとく (風良ゆう 著)」、「傲慢と善良 (辻村深月 著)」を挙げておく。橘玲、出口治明のお二人は最先端の科学や古今東西の歴史を、一般の読者に対してわかりやすく解説できる希有の著述家だ。「汝、星のごとく」と「傲慢と善良」は、ともに映画化されているが、書籍版を大学生の時にこそ読書か聴書するのも楽しいのではないかな。

本学の学生には言葉の宝庫である図書館をたくさん利用して、多くの言葉と出会い、言葉の力に触れてほしい。希望の言葉に触れて、あなたが見ている景色を変えてほしい。今の私の願いだ。

教員寄稿



人を動かす

経営学科 大田謙一郎

私がおすすしめしたい書籍の1つとして、デール・カーネギー著『人を動かす』を挙げたい。本書は『How to Win Friends and Influence People』を訳したものとなる。原書は、1936年に初版された古典的な位置づけにあたる本となっている。カーネギーは、アメリカにおける成人教育、人間関係研究の先駆者で、デール・カーネギー研究所の所長として、話術並びに人間関係の新分野を開拓した人物である。彼が約15年にわたる指導の現場から生まれた事例を取り上げた内容が記載されており、すべて実験済みのものばかり列挙されているので根拠としては十分且つ信頼できるものとなっている。

本書のまえがきにも記載されているが、そもそも1936年に初版された本であることから、そこで紹介される事例は、現代の社会習慣から見れば、いかにも古めかしく感じることもあるかもしれない。しかしながら、上記に記述した通り、彼が世界的な活動のなかで集めた事例であり、それらを親しみやすく独特の陽気な口調で読者に語り掛けるような文章となっているため、分かりやすく興味深く読み進めることができるのではないかと思う。

本書の内容は、全て興味深いものとなっているが、1つ事例を取り上げたいと思う。本書の事例のなかに、ベンジャミン・フランクリンの話がある。若い時は人付き合いが下手で有名だった彼は、後年、非常に外交的な技術を身につけ、人を扱うのがうまくなり、ついに、駐仏アメリカ大使に任命された。彼の成功の秘訣は「人の悪口は決して言わず、長所をほめること」だと断言している。人を批判したり、非難したりすることはどんな馬鹿者でもできる。そして、馬鹿者に限ってそれをしたがるそうだ。理解と寛容は、優れた品性と克己心を備えた人にしてはじめて持ち得る徳であると結論づけている。他にも優れた事例が数多く記載されている。未読であるならば、是非とも読んでほしい1冊となっている。



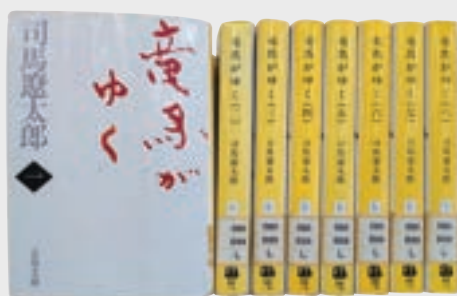
バーナード・クリック著：大河原伸夫〔ほか〕訳（2011）
『シティズンシップ教育論：政治哲学と市民』法政大学出版局

政治リテラシーから考える 政治や社会との向き合い方

公共政策学科 有本 新

原書の著者であるバーナード・クリック（Bernard Click, 1929-2008）は、イギリスの政治哲学者であり、1960年代末から市民育成のための教育（シティズンシップ教育）を学校で実施する必要性を強調していた人物です（p.291）。かつてのイギリスの教育では、特別なシティズンシップ教育は不要だと信じられていました。なぜなら、「イギリスの市民は国王の臣民であって、国王に仕える大臣が法で認めた権利を持つ者、とみなされて」（p.16-17）おり、「シティズンシップ教育が公立学校で広く実施されれば、権威尊重の習慣を攪乱しかねない」（p.17）と考えられたからです。しかし、クリックは、伝統的な遵法精神を持つばかりではなく、法に対する批判的な見方で考えることができる能力や、政治論争が何をめぐるべきか、関係者がどのような視点から主張し、その論争が自分たちにどのような影響をもたらすのかを理解する力（政治リテラシー）を育む重要性を説きます。若者の政治的無関心や低投票率、排斥や青年犯罪への憂慮だけでなく、上述した能力を育てることを目指さなければ「民主主義にとって災いとなる」（p.25）と考えられたからです。

クリックが示した政治リテラシーを高めていくことは今日の日本においても重要なことではないでしょうか。例えば、若者の投票率の低さや政治的無関心などは日本においても問題視されておりますし、SNS等によって情報が氾濫する中で誰に投票するかを選択する際には、政治論争が何をめぐるべきか、政治家がどのような視点から主張し、その論争が自分たちにどのような影響をもたらすのかを冷静に理解する力が大切になるでしょう。最終的には、本書を通して自分の生活等において重要な社会問題の論争に主体的に関与していくために、どのような能力を育むことが必要なのかを学ぶ機会になれば幸いです。



大学生の皆さんへのおすすめ 『竜馬がゆく』

情報システム学科 平岡 透

大学生の皆さんにおすすめしたい一冊は、司馬遼太郎さんの『竜馬がゆく』です。

私自身、大学に入るまで読書の習慣がほとんどありませんでした。しかし、学生時代にアルバイトをしていた焼鳥屋で、常連のお客さんから『『竜馬がゆく』は面白いよ』と勧められたことをきっかけに、全巻をまとめて購入し、大学2年生の夏休みに一気に読み切りました。そのとき、「なんて読みやすい文章なのだろう」と感動したのを覚えています。それ以来、司馬遼太郎さんの作品に夢中になり、さまざまな作品を読み漁るようになりました。

『竜馬がゆく』を通じて、坂本龍馬という人物に強く惹かれるようになり、当時は毎日のように坂本龍馬のことを考えていました。土佐（現在の高知県、坂本龍馬の生誕地）の桂浜にも足を運びましたし、2016年に長崎に来てからは龍馬ゆかりの地である亀山社中にも何度も訪れています。

今では、一つの作品にそこまで深く感動することは少なくなりましたが、それはやはり、大学生という若く多感な時期だったからこそだと思います。本は想像力をかき立て、行動の原動力にもなり得る存在です。だからこそ、大学生の皆さんには、今のうちにたくさんの本と出会ってほしいと願っています。きっと人生の幅が広がり、日々がより豊かで楽しいものになるはずです。

また、『竜馬がゆく』をきっかけに読書が好きになり、本屋にもよく足を運ぶようになりました。社会人になってからは、月200時間を超える残業や残業代のカットの中で、会社や社会のためという気持ちで働いていましたが、それでも不満や怒りで心がいっぱいになっていました。そんなとき、本屋で京セラ創業者・稲盛和夫さんの本と出会い、「こんな人がいるのか。自分もがんばってみよう」と、前向きな気持ちになることができました。

このように、本は人生の先輩たちの経験や、自分では体験できない物語に触れさせてくれる、かけがえのない存在です。ぜひ、大学生の皆さんにも、さまざまな本と出会い、それを人生の糧にいただければと思います。



「某砂浜海岸で拾った、私の『いい感じの石ころ』(長崎翡翠)」

(『いい感じの石ころを拾いに』、宮田珠己著、河出書房新社)

「コスパ」「タイパ」の時代に、わざわざ海岸で「いい感じの石ころ」を探す

栄養健康学科 本郷 涼子

休日の図書館で、美しい石ころ達の表紙が目にとまった。宝石とは違い、くすんだ色で地味。でもなぜか心惹かれる「いい感じ」の石ころ。

宮田珠己の「いい感じの石ころを拾いに」は、北海道から離島まで、ただ海辺にしゃがみこんで、なんてことない石ころを拾い続ける紀行エッセイである。新潟県の翡翠が拾える海岸で、敢えて名もない石ころを拾う。茨城県では大胆な縞模様の瑪瑙を拾う。このエッセイでは、驚くようなハプニングや、思わず涙する感動エピソードは一切ない。自分にとって最高の石ころと出会うまでの過程と、拾った石がいかに「いい感じ」かを、ゆるゆると綴っている。その緩さがとても心地いい。

ただ、この本で紹介されるコレクターの石ころ愛は熱い。世の中には、ナミビアやタクラマカンで、わざわざ石ころを拾おうと思う人がいるそうだ。アンゴラで拾った石は、トルコ石が混ざり手に持つとしっくりくるらしい。エチオピアの名もない石は、ねっとりした見た目だそうだ。そうそう石ころに使う表現ではない。

この本を読むと石ころを拾いたくなる。調べると、長崎県にも水晶や瑪瑙などがあることがわかった。ただし、詳細な場所は非公開。地図を片手に海流・川の位置・過去の採掘調査報告を手掛かりに調べると、とある砂浜海岸を見つけた。私の予想では、この海岸に長崎翡翠（ネフライト）が流れ着いているはずである。

晴天の休日に某砂浜海岸に行ってみた。砂浜には灰緑色の砂粒が無数に散らばっていた。これは期待大である。しばらく歩いて、黒っぽい石ころを拾った。スマホのライトで照らしてみると、石ころが、ぽうっと緑色に輝いた。

長崎翡翠だ。なんて綺麗な、いい感じの石ころだろうか。

筆者のあとがきにはこう書かれている。「とにかく海辺にしゃがみこんで、なんかいい感じのする石ころを探していれば私は満足だった。そして、それ以上主張したいことは、とくにないのだ。」

“なさそうでなかった”石ころ拾い紀行。きっとあなたの心も軽くなります。

大学で学ぶメリットとは

佐世保校附属図書館長 綱 辰幸

1年生の皆さん、4月から始まった大学生活は順調でしょうか？

高校までと大学の違いの一つは、知った人がいないというところにあるかと思います。小・中・高と進学していくときには、同じ学校出身者など、ある程度知っている人がいたはずですが、しかし付属校がない本学には全国から学生が集まるため、入学時には知り合いが少ないのが普通です。人数は多くはありませんが、留学生も一緒に学んでいます。

これまで一緒に過ごしてきた仲間や家族と時間を共有できることは安心につながります。しかし、大学で学ぶ大きなメリットの一つは「アウェーの環境で学ぶこと」ではないかと思います。地元の友人は似たような環境や経験を共有しているため、考え方も似てきがちです。一方、大学には、日本や海外の様々な地域や、都市部や地方部など、多様な環境で育った仲間が集まっています。その異なる視点や考え方から、皆さんは大きな知的刺激を受けていることでしょう。

この「異なる環境で学ぶ」ことは、高校までにはなかった経験であり、皆さんの成長をこれからも大いに促すものです。さらに本学には、「しまなび」、インターンシップ、留学、地域活動などもあり、これもまた「アウェーの場」と言えます。在学中に積極的に挑戦してみてください。地域や世代を超えた人々との交流を通じて、多くの気づきを得られるはずです。その刺激や気づきを、今後どう活かしていくかということを考えることも大切です。

もう一つの大学生活のメリットは、大学の設備や施設を自由に利用できることです。これは、すべての学年に通じることですが、みなさんは、授業を受け、単位を取るだけでなく、授業料を納めている期間、大学のさまざまな設備を活用できます。例えば情報処理教室にあるパソコンやソフトウェア、そして何よりも図書館です。図書館には落ち着いて学習できる環境が整っていて、遅くまで利用でき、豊富な蔵書や映像資料などがあります。インターネットや生成AIでも簡単な情報は得られますが、より体系的に深く調べるには図書館が最適と言えるでしょう。

教養セミナーのテキストには次のような記述があります。

ある辞書によると「(高校生である)生徒は教育を受ける者」、「(大学生である)学生は学業を修める者」と示されています。大学では学びの内容のレベルが上がるとともに質が異なります。

高校と同じような受け身の態度では学業を修めることは不可能です。

自ら「問題を発見」し、「問題を解決」していく能動的な態度こそが学業を修めることを可能にします。

高校までの学びには、あらかじめ答えがあるものが多かったと思います。しかし、大学の学びは「問題」や「問い」を見つけることから始まります。その問いは、「今日のお昼には何を食べるか」とか「どこで安い米を買えるか」といった日常的な問いではありません。大学生らしい、さらに突っ込んだ問いを立てるには、まずそれぞれの分野の基礎知識が必要です。学部、学科で生じている「問題」、「問い」とは何かを知るためには、授業だけではなく、図書館にある先人の書籍や論文、そして各種のデータベースをぜひ活用してください。能動的に学び、図書館を利用することが、「問題を発見し、解決する力」を育てます。また、大学の先生方はその専門家です。図書館で見つけた「問い」の解決に行き詰まったら、先生に相談するのも有効な方法でしょう。これからも、大学に入学したメリットを最大限に活用し、充実した大学生活を送ってください。

図書館アルバイト学生からのメッセージ

大学生活に図書館という選択肢を 経営学科4年 池野谷光李

図書館は落ち着いた空間で本や雑誌を読んだり、自分の好きな本を借りたりすることができる場所です。また、資料を使って自分の学びに活かすことが大いにできる場所です。静かに読書や勉強ができるスペースがあり、集中して課題や勉強に励むことができます。

私自身、以前は全く図書館を利用しなかったのですが、空きコマなどの休みに図書館にふらっと立ち寄ってみると、普段の暮らしから1歩抜け出して息抜きをすることができました。公務員試験の勉強の際には、一日中図書館に籠って勉強をしていました。とても集中できたのを覚えています。

煌めくものや瞬発的な物事が評価されがちな現代において、洗練された言葉を紡いで書かれた本を読むことは、じっくりと自分と向きあう時間になると感じています。本を読むことは頭の栄養でもあり心の栄養でもあると感じています。

県立大学の図書館は県立大生であれば使い放題ですので、大学生ってなんか暇だな、充実感にかけているなと感じるのであれば、是非図書館に立ち寄ってみてください！

新しい本との出会いがきっとあなたの人生を豊かなものにしてくれます。

ふらりと立ち寄る図書館時間 公共政策学科4年 村川 琴美

図書館に訪れると、普段の生活がほんの少し豊かになるような発見があります。忙しい日々の合間に立ち寄れば、気持ちを切り替える小さな休憩所にもなりますし、偶然手に取った本との出会いから、自分自身へのヒントを得ることもあります。一冊の本を手にとることで、遠い国へ旅したり、まだ見ぬ世界を知ったり、気持ちが少し軽くなることもあります。また、図書館は本を借りたり、読んだりするだけではなく、勉強や作業のために落ち着いて集中できる環境としても最適です。暑い日は避暑地として涼しい空間で読書や作業に没頭したり、あるいはビデオをみて過ごすのもいいでしょう。個室やグループ学習室もありますし、図書館で頑張っている人の姿が励みになることもあります。季節に合わせた展示やイベントも行っているのので、ぜひ気軽に立ち寄ってみてください。

知の迷宮探索への誘い（その2）

～アクチュアリティな学びの実空間としての図書館の意義～

シーボルト校附属図書館長 河又 貴洋

今回は大学の図書館を「知の構築」の歴史における位置づけと、インターネット時代の現代における「知の連結点」としての機能から見てみましたが、今回は「学ぶこと（Learning）」の系譜から捉え直してみたいと思います。

「学ぶこと」の系譜と言われてもピンとこないかもしれませんが、「学び」の認知科学には二つの系譜があるといわれます¹。一つは近代西欧に端を発する「教育」で目標を必要とする「学習」です。「學」という字は学ぶ門をくぐる子どもの上に「知識を積む」という意味の形が乗っていて、「習」は絶え間なく練習することで（慣れる）。それが「学習」です。もう一つは、目標を必要としない「学び」で主体（サブジェクト）と客体（オブジェクト）である環境との関係性形成によって生の更新のために学び、自己の成長を促すというものです。後者は東洋的な「修行」の道に通じるものでもあります。

これら二つの Learning を比較考量してみれば、以下のようにになります。目標を必要とする「学習」は認知論的であり、目標を必要としない「学び」は存在論的です。

認知論（唯脳論）的「学習」	存在論（生態論）的「学び」
「学習」：目標を必要とする	「学び」：目標を必要としない
課題解決型学習 (Project-Based Learning)	問題発掘・発見型学習 (Problem-Based Learning)
産業化時代の教育モデル	情報化時代の学修モデル
機械論的身体（作る） データ論的情報＜コンテンツ：個別内容＞	生命論的心身（育む） ネットワーク論的知識＜コンテクスト：文脈＞
「スーパー知能主義」 知性とは区別される知能が技術知として全開する ⇒ AI ～シンギュラリティ（技術的特異点）	改めて「教養主義」 「教養とは、節度」（福田恆存） ⇒ ユーモア（余裕＝節度）
生計の道を教えるもの（検索＝必然） ヴァーチャル空間としてのインターネット	生き方を教える（探索＝偶然） リアル空間としての図書館

これを今日的なインターネット（オンライン）での「学習」と図書館での「学び」とに関連付ければ、目標が明確な「学習」はAI 開発にみられるようにインターネットを活用した「スーパー知能主義」に傾倒しがちであるが、書籍をベースにした単に知識量ではない実体としての「教養主義」のリアルな空間を提供するものです。いわば、電子化されたビットの知識はネット空間を浮遊し、実体なく存在するが〈検索〉を通じて瞬時に出現させることができるが、アトム（原子）によって構造を有する書籍に集積され実体として存在する知識は偶然の出会いを招来する〈探索〉によって「アクチュアリティ（現実性）」を体現することでもあります。ここで、「アクチュアリティ」とは「現実に向かってはたらきかける行為そのもの」、すなわち図書館（そしてそこに在る蔵書）という現実（もの、事物）における読書（行為）を通じて実感する現実性といえるものです²。

そのような「存在論的学び」の館としての図書館の書籍の杜で、インターネットでの〈検索〉に終始する学習から逃れ、〈探索〉の学びに浸ってみてはいかがでしょうか（もちろん、図書館でも〈検索〉学習は十分にできます）。

さて、今回は図書館を「パブリック（public 公共性）」の観点から捉えてみたいと思います。

¹ 松下良平「学ぶことの二つの系譜」佐伯胖 監修 / 渡部信一 編『「学び」の認知科学事典』（大修館書店、2010 年）所収を参考

² 木村敏の概念において、リアリティ（reality）は誰が見ても客観的に認識できる、科学で扱える現実であるのに対して、アクチュアリティ（actuality）は科学では扱えない、個人にとって絶対的で主観的な現実性である。（『偶然性の精神病理』岩波現代文庫、2000 年参照）



図書館利用案内 電子書籍



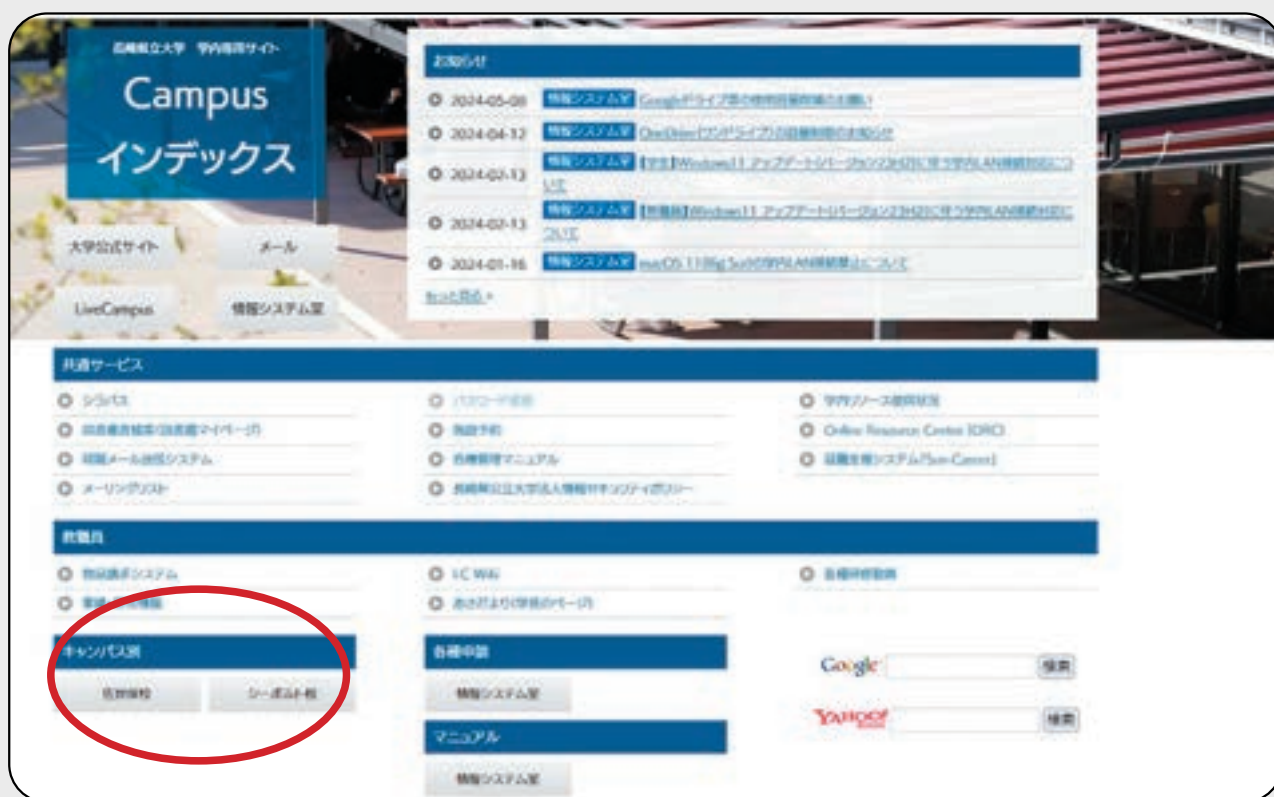
佐世保校・シーボルト校両図書館では、身近に電子書籍を利用いただくために、「Maruzen eBook Library (MeL)」(丸善雄松堂)・「KinoDen」(紀伊國屋書店)を導入しています。(※このほかにも各館独自で導入したタイトルもあります。)

【電子書籍のメリット】

- 1 利用者が居場所や時間を選ばずに、自分のスマホ・パソコン・タブレットで利用できます。
(リモートアクセスの設定が必要)
- 2 閲覧だけでなく、語学教材の音声資料・映像資料などのデジタル資料を視聴できます。
- 3 両図書館で購入した電子書籍は、「長崎県立大学」の電子書籍として、共有して利用できます。

【電子書籍の利用方法】

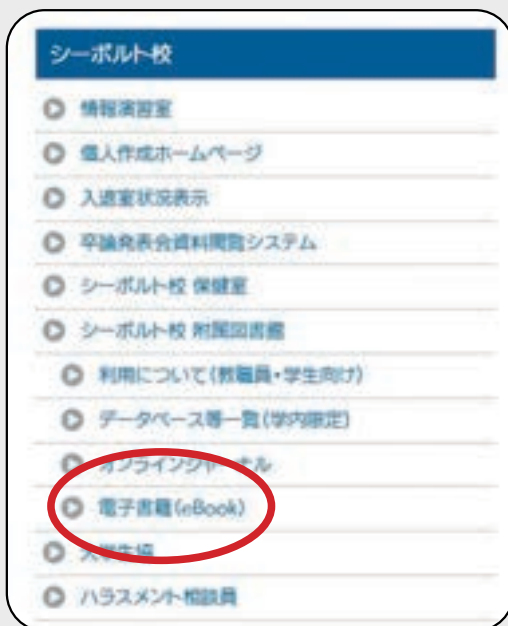
Campus インデックス>キャンパス別から自分の在籍校(佐世保校 or シーボルト校) を選択



各校のメニューが表示されますが、両校とも

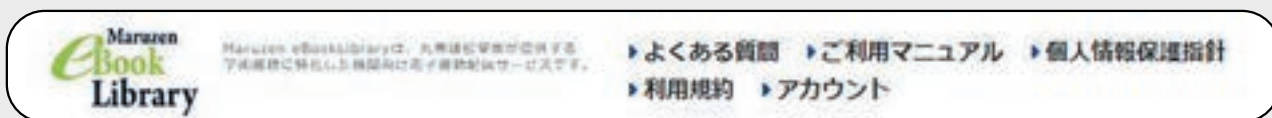


を選択



「Maruzen eBook Library」「KinoDen」の下段の「リモートアクセス登録方法」により、自宅や帰省先など学外からも電子書籍を利用できるように設定が可能です。

- ・「MeL」「KinoDen」の起動画面には、マニュアルやヘルプが表示されていますので、参考にしてください。



KinoDen はここをクリック



- ・電子書籍は、一度に利用できる利用者数に制限（通常は1人）がありますが、1利用者が1日に何冊でも利用可能です。ただし、利用中に一定時間アクセスがない場合は、システム上自動的に利用が停止されます。

◎電子書籍利用の詳細については、図書館職員にお尋ねください。

佐世保校附属図書館
〒858-8580 佐世保市川下町 123
TEL.0956-47-2191（代表）
<https://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

シーボルト校附属図書館
〒851-2195 西彼杵郡長与町まなび野 1-1-1
TEL.095-813-5500（代表）
<https://sun.ac.jp/center/lib/siebold/>

開館時間

平 日：午前9時～午後9時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで 休館日：日曜日・祝日・大学閉校日など

